

新入生オリエンテーションキャンプを終えて

学 生 部

広島大学恒例となった新入生オリエンテーションキャンプを4月28日(土)、29日(日)の両日佐伯郡宮島町の宮島包ヶ浦自然公園キャンプ場において、実施した。

18回目となる今年度のキャンプは、新入生1,911名、留学生1名、フェロー154名、運営役員191名、教職員200名の総勢2,457名の過去最高の参加があり、テント設営数も約500という壮大なものとなった。

このキャンプを実施するまでに、主催側の大学及び主管側の体育会によってフェロー講習会、フェロー間のオープニング合宿、フェローのプレキャンプ、フェロー及び運営役員によるリハーサルキャンプ、班ごとの顔合せ、テント設営会、パンフレットの作成、雨天等非常時の対策など、半年をかけて準備を行い万全を期してキャンプに臨んだ。

キャンプ実施前から一番心配していた天候については、28日夜から29日早朝にかけて小雨が降り、時折豪雨に見舞われ、テント場を一部移動した班もあったが、雨天対策がしっかりとしていたため混乱もなくスムーズに行なわれた。また、この雨のため29日の早朝企画も一部中止となったが、これ以外で予定した企画は晴天に恵まれ、大きなけがもなく順調に進んでいった。

キャンプ参加者は、28日午前8時30分、趣向を凝らしたコスチュームで宇品港に集合し、約40分の船旅、500m余りの浜辺の行進、開村式、テント設営、学部コミュニケーションと予定された企画を順調に消化していった。

そして、その企画が進むに連れて新入生達が、次第に打ち解けあい活気づいていくのが感じられた。また、このキャンプのメインで

あるキャンプファイヤーに入ると、その活気も一段と高潮し、皆が一つとなり、このファイヤー最後のプログラムであるキャンドルロードでは、何とも言えぬ美しい光景を目にすることができた。

今回の企画の中で「学部コミュニケーション」というものがあったが、これは従来行ってきた「学部別行事」を本来の主旨である「新入生・在校生・教職員の三者による真なるコミュニケーションを計り、また、その中で新入生に対して在校生・教職員一体となり、「学業、大学生活等のオリエンテーション」ということに沿うように見直されたものであり、学部別にいろいろ工夫をこらした企画が進められたようであった。

新入生にとってこのオリエンテーションキャンプは新入生同志、先輩、先生との自然の中での共同生活を通じ、広島大学学生としての自覚と連帯感を深め、新たな友人・先輩・師を得ることのできた生涯忘れることのできない、極めて有意義で貴重な経験であったと思う。

最後に、新入生諸君が今後の大学生活を円滑に営まれるよう祈念し、このキャンプを実施するにあたりご協力いただいた関係各位に深く感謝いたします。



オリキャンではじまるオリキャン

第18会新入生オリエンテーションキャンプ総局長

中川 雅文 (62.工学部)



「ハイヅカコール。そーれ、ハイヅカズンバズンバ……」包ヶ浦の棧橋でハイヅカコールが自然に呼びかける。そして最後の6便が棧橋を離れたとき、第18回新入生オリエンテーションキャンプの幕がおりた。

僕はこの時、オリキャンに関わってきた自分の3年間の大学生活を思い出していた。新入生の時、オリキャンに参加して、オリキャンの大きさ、そして何よりも広島大学の大きさ、広大学生のPOWERに驚き、感動した。そしてフェローから、運営役員、あっという間に総局長になっていた。

僕はこの第18回新入生オリエンテーションキャンプにおいて、総局長としていつも頭に入れていた事があった。それは「いかに自分で考えて、自分なりの考えを確立するか」という事である。最近「個性がなくなっている」と言われる。また広島大学が「特徴のないのが特徴」と言われるようになって久しい。物事1つとらえるにしても個人一人一人とらえ方が違うはずである。なにか行動する時も人それぞれ、その人なりのやり方がある。多くの人間が集う集団生活の中で、いかに自

分というものを深く見つめ、自分らしさを育てていくか、ということを僕は常に考え、半年間の準備の中で、運営役員に言ってきたつもりである。そして個人が自分らしさを生み出していくことが、オリキャンという集団を、そしてこの広島大学を活気あるものにしていくと考えてきた。僕がオリキャン総局長としてみんなに訴えてきた事の答えはこれからのみんなの大学生活であると思う。

オリキャンは本当にすごい。宮島に集う2,500余名がそれぞれ思い思いの楽しみ方をし、思い思いの1泊2日を過ごす。そして1つに集まるとものすごいPOWERを生み出す。そして参加した人全てがかかえ切れないう程の思い出をオリキャンからもらってしまう。でもここで僕は声を大にして言いたい。「オリキャンで終わっちゃだめ」と。オリキャンは大学生活の集大成ではなく、スタートである。新入生にとっても、フェローにとっても、運営役員にとっても。このオリキャンで感じた広島大学を、広大学生の活気をその後始まる大学生活の中で、さらに大きなものとして、育てて欲しい。そして広大学生全員が自分らしさを持ち、自らの大学生活を自らの手で創造(クリエイト)して欲しい。

統合移転の中、オリキャンはいつなくなってもおかしくない状態である。でも、こういう状態だからこそ、オリキャンは今なくなるとはいけない。広大学生が一生懸命になれる場所、広大学生が夢をもつ空間であるオリキャンは、この広島大学に必要な不可欠なのである。



運営役員、そしてフェローのみんな、半年間どうもご苦労さまでした。みんなが一生懸命になれたこの半年間は決して無駄じゃなかったと思う。この半年間で得たものをポケットにしまって今後新たなる第一歩をふみ出して下さい。

新入生のみんな、もう君達は新入生じゃなくて、広大学生である。大学の4年間をフルに活用して、いい顔をして下さい。

広大学生よ、「オリキャンではじまるオリキャン」であれ。そしてこの広島大学が活気あふれる顔でいっぱいになることを期待しています。

オリキャンの準備役員をやって

事業局準備役員

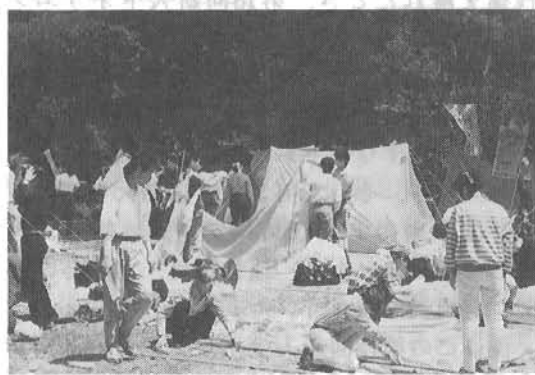
池田 佳代 (01. 学校教育学部)

私は、文章を書くのがとても苦手なので、すごく困っています。だけど、今回、オリキャンの準備役員をやって、自分自身、本当によかったと思っているし、来年は、くじとかじゃんけんじゃなくて、自分から準備役員をやってみようという人が1人でも多く出てくれればいいなと思って書いています。

先輩方に大変だという話はよく聞いていたのですが、実際は思っていた以上に大変でした。4月に入ってからは、特に忙しくなって、局員の人の家に泊まって資材を作ったりしました。毎日、睡眠不足で、お風呂にもあまり入れず、同じ服で学校へ行くという日が続いて、自分でもなんてすごい生活をしているんだろうと呆れるくらいでした。でも、そうやってみんなと一緒にいるのが凄く楽しかったし、今ではとてもいい思い出です。

私が本当に“がんばるぞー”という気持ちになったのは、4月1～3日のリハーサルキャンプのファイヤーの時でした。私は体調が悪かったりして、最初はほとんど局会にも

行っていなくて、チーフの人や局員のみんなにすごい迷惑をかけていました。でも誰も何も言わず、何もわからない私に、親切にいろいろと教えてくれました。それに、最初はちょっと恐そうだなーって思っていた総局の方も、「いっちゃん、元気ー？」とか、声をかけてくださったり、学校でフェローの子が、「いっちゃん、バイバイ」って言ってきてくれたりして、とても嬉しく思っていました。そしてリハーサルキャンプのファイヤーの握手退場のとき、知ってる人も知らない人も、みんなが「いっちゃん、がんばろうね。」って声をかけてくれて、クラブの先輩も「がんばれよ。」って言ってくださって、同じ準備役員の人が、頭をぼんっとたたいて「がんばろうぜ。」って言ってくれて、そして最後に、汗をたらたら流しているエールマスターのつーさんと握手して、総局長の中川さんのところまで来たとき、私はちょっとだけ泣いてしまいました。このとき、なんかわからないけどすごく感動して、とにかく本番までがんばるぞーという気になったのでした。



そしていよいよ本番です。私たちは参加者より2日前に宮島へ行って、準備ヤリハーサルをしました。本番は特に長くてきつかったけど、最後に参加者のお見送りで、桟橋でハイヅカをしているときに、このためにがんばってきたんだなーと思いました。自分たちが船に乗るとき、総局の方や本役の方と握手をして、その時我慢できなくなって泣いてしまいました。船の中でもずっとハイヅカをし

て、宇品が近くなってきたとき、チーフの胴上げをしました。その後、準備役員の胴上げになって、私も生まれてはじめて、胴上げをしてもらいました。なんか上手に言葉にできないけど、とにかく私は準備役員をやってよかったと思っています。もちろん、まったく悔いがないというわけではないけれど、こういうことは今だからこそできたのだと思うし、この感動を忘れないで大人になっていきたいと思います。去年は新入生として参加して、とても楽しかったのですが、今年は、参加者としてでは味わえない感動を味わうことができました。最後に、オリキャンにかかわったみなさんへ、お疲れ様でした、そして、ありがとうございました。

自分にとっての「オリキャン」

フェロー

平野 潤 (01.医学部)

「オリキャン」、それは一体これまでにどのくらいの広大生達が耳にし体験してきたことなのだろうか？ この言葉には何千何万もの人何千何万通りもの熱い想いが込められているような気がする。

自分にとってこの「オリキャン」とはどういうものだろうか、僕が最初に、そして最も強く「オリキャン」を感じたのは1989年4月22日の夜小雨のちらつく中で行なわれた第17回のオリキャンのfireの時だった。狂ったように大声を上げ、走り、そして踊った、その瞬間に「オリキャン」を、いやこの「広大」を感じたのだ。何をどう感じたのか口ではうまく言えなかった。しかし確かに何かを感じたのだ。今までの自分とは何かが違うと……

そして約8か月後にFellowの募集があった。すぐに思った事はもう一度あの感動を味わいたい、皆で大声を上げ、走り、そして踊りたいと。しかしなかなかFellowをやる勇

気は出ずにいた。自分の他に誰かがやるさ、と心の中では思っていたのだ。だがもう一度あの時のfireの時を思い出し、変わった自分という漠然としたものの答えを自分なりに出してみたのだ。



——俺は変わったんだ、やりたい事は素直にやろう、自分の心に素直になろう、周りを気にしたり頼っていたはダメだ——。

つまり僕にとっての「オリキャン」とは自分自身を変える1つのTurning Pointだったのだ。

ここで今回参加された新入生全員に言いたい。この「オリキャン」において、感動した人、楽しんだ人、つまらないと思った人、皆それぞれその人なりの感想を持っていると思う。しかし「感動」はこれからの大学生活でいくらかでも得ることができます。

「楽しみ」はこれからの大学生活をいくらかでも楽しめます。

——つまらないという思いも、ひょっとしたらこれから味わうかもしれません。

結局、「オリキャン」とは、あの1泊2日の特別な行事にすぎないのではなく、これからの大学生活に起こり得るすべての要素を含み得た、すべての意味でのオリエンテーションなのです。だから「オリキャン」は「オリキャン」が終わったから、キャンプが終わったから終りということではなく、「オリキャン」は大学生活を広大で始めるにあたっての1つのStepとして、また、大学生活の1つの通過点として、とらえて下さい。そして君達は

それをたった今、通過したにすぎません。君達の可能性は「オリキャン」と同様に無限大なのです。

この「オリキャン」が君達にとっての1つのTurning Point となってくれば幸いです。

最後に、体育会の方々、各局員の方々、一緒にがんばった Fellow の仲間、また参加新入生全員に、そしてなによりもこの「オリキャン」が存続できる「廣大」に感謝してやまない。



OH! オリキャン

新入生

正本 智恵 (02. 総合科学部)

オリキャンは、約1週間前から始まった。アンダシート、フライシート作り、コスチューム作り、買い出しと大忙しだった。私たちの班のコスチュームは、千手観音で、その腕をどうするかでいろいろ悩んだ。どうしても腕を動かして、「DREAMS」のポーズを決めたかったけれど、結局できなくて、少し残念だった。

実際オリキャンに行ってみると、いろいろなコスチュームが自分たちの班の個性を出し合って、見ているだけで楽しかった。私たちの千手観音も、まわりからはじゃま扱いされ、腕も複雑骨折したりしたけれど、結構インパ

クトがあった。確かに、あのコスチュームをつけて走っている姿は、笑いを誘ったけど、私たちの班のみんなは気に入っているようだった。

班の活動の中の、ミニファイヤーでは、ついたかと思うとまた消えてしまう火を囲み、自分がこれから何をしていきたいかを順に語った。そこで今まで気づかなかった、その人、その人の側面に気づき、知らなかった過去を知った。そして、あらためて、いろいろな人が、いろいろな理由で廣大に来ていんだなと感じた。また、人生の夏休みと言える大学での4年間、みんなまだ具体的に、はっきりしていないけれど、何かしたいと考え、自分にとってそれが何なのか探しているように感じた。

野活では、私たちの班は、山を越えて、表宮島まで行った。木が陰をつくっている所では、さわやかな風が吹きぬけて、小川の涼し気な水音といっしょに、どこからか、蛙の鳴き声が聞こえてきた。山の上からは、穏やかな瀬戸内海が見渡せた。そして、もみじ谷を降りていき、巖島神社に行った。そこで、食べた温かいチーズもみじまんじゅうは、もと地元人が勧めるだけあって、今まで食べた中で一番おいしかった。

オリキャンの間は、とにかく大声を出しまくって、踊りまくった。行きの船でも、ファイヤーの時でも、帰りの船の中でも。特に帰りの船の中では、総科コール、DREAMS、安芸の国、はいずかと、凄かった。はいずかなんかは、いったいつまで続くのか分からなかった。みんな恥を捨て、みんなばかになって、はたから見ると気違い集団と思えたかもしれなかったけれど、私たちには、そんなことはまったく関係なかった。ばかになれる時なんて、そんなにないのに、その時に1人さめているのは絶対つまらないと思う。ばかになる時にばかになるのは、とても楽しいことだと思う。

最後に Fellow の先輩方や、オリキャンを支えて下さった先輩方には、本当に感謝で

いっぱいです。声をからしても、大声を出し、疲れていてもそんな素振りには、まるで見せず、私たちが引っ張って行って下さったから、こんなに楽しかったのだらうと思います。オリキャン打ち上げの後の、Fellowさんの身にしみる言葉を心にとめ、人生の夏休みを、何かに打ち込んで過していきたい。

オリキャンに参加して

新入生

戸高 明美 (02. 学校教育学部)

広島での生活が淋しくないようたくさん友達をつくりたいというのが、私がオリキャンに参加した一番の理由でした。先輩方の話を聞いても、「楽しいから絶対参加した方がいいよ。」ということだったので、私の中のオリキャンへの期待はかなり大きくなっていました。でも、本番のオリキャンは、私の期待の何倍も何十倍も素晴らしいものでした。思い出はたくさんあるけど、まずは、みんなで作ったコスチューム。かなり派手だったけど、個性も生かしてみんな見事に着こなしていましたよね。オリキャンの最後に書いてもらった言葉と一緒にずっとずっと大切にしまっておきます。それから、煙の中根性で炊いたご飯。男性諸君は本当にご苦労様でした。すごくおいしかったです。そして夜空にパッと開いた花火がとても感動的だったキャンプファイヤー。まったく別の班の人とも仲良くなれて良かったです。あの時のろうそくの光は忘れられないと思います。それから2,400人が一つになった、チクサクコールとハイズカ。特に、帰りの船の中でのハイズカにはびっくりしました。もちろん、廣大生のパワーを感じて感動したのも事実です。オリキャンでの出来事一つ一つが、私にとって決して忘れることのできない思い出になるでしょう。

でも、オリキャンに参加して1番嬉しかったのは、出会って一週間しかたっていないメンバーとこんなにもキャンプを楽しむことができたということです。機械的に振り分けられたメンバーなのに、初めて会った人ばかりなのに、今では中学・高校が同じだった幼なじみみたいに何でも話せるようになりました。私の班は工学部と組んで活動したのですが、学部なんて関係なく本当に良くまとまっています。たった一週間で人間ってこんなに親しくなれるんだなあオリキャンの間中が感動の連続でした。今の関係がずっとずっと続くといいなと思います。そして個性の強いメンバーをここまでまとめてくれたフェローさん



には、感謝の気持ちでいっぱいです。あと一年たった時、私もフェローさんたちみたいに素敵な先輩になりたいと思います。この班で良かったと心から思える最高のメンバーでした。きっとどの班の人でも、自分の班は最高だって胸を張って言えると思います。だからこそ2,400人の心が一つになることもできたのだと思います。だから私は、オリキャンに参加したみんなにありがとうと言いたいです。たくさん思い出と素敵な仲間を与えてくれたオリキャン。そのオリキャンを企画・運営してくれた先輩方にも深く感謝しています。フェローさんからオリキャンの準備がどんなに大変だったか聞きました。夜遅くまでの見回りも大変だったと思います。本当にどうもありがとう。みんな、オリキャンの思い出と仲間たちを大切にしていこうね。